



# Emergency Watch

No.65 May. 2016

神戸こども初期急病センター

2016年4月受診者数

2042人



## 【疾患頻度】

1. 急性上気道炎・咽頭炎	: 556人
2. 感染性胃腸炎	: 273人
3. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 172人
4. 感冒	: 111人
5. 気管支炎	: 90人

4月から5月にかけてインフルエンザの流行もなくなり、神戸こども初期急病センターの受診者数も少し落ち着いてきました。ただ、未だに感染性胃腸炎（嘔吐下痢症）の患者数には極端な減少がみられず、普段の手洗いを始めとした感染予防に気をつけましょう。

さて、本日はこれからの季節に患者数が増える事が予想される流行性耳下腺炎についてご紹介します。

### ➤ どのような病気か

流行性耳下腺炎は「おたふく風邪」や「ムンプス」とも呼ばれる、ムンプスウイルスというウイルスによって引き起こされる全身性の感染症です。好発年齢は3~6歳で、一年を通して発症する可能性がありますが、特に毎年5月から7月頃に流行する傾向があります。

主な症状は発熱と耳下腺（耳の下）の腫れですが、耳下腺以外の唾液腺（唾液をつくる場所）である顎下腺や舌下腺が腫れる場合もあります。耳下腺の腫れは片側だけの場合も、両側に及ぶ場合もありますが、大体4日から1週間程度で落ち着きます。

### ➤ どのように感染するか

すでに感染している子どもの唾液中にウイルスが排泄され、飛沫（つば）の吸入や食器・コップなどを共用することによって伝染していきます。また、潜伏期間は2-3週間と比較的長く、学校や集団保育の場などで流行しやすい感染症です。一旦この病気に罹った場合には、耳下腺の腫れが出現してから5日以上経ち、元気になるまで（ウイルスが排泄されなくなるまで）登園・登校はできません。

### ➤ 合併症について

ほとんどの場合には前述した発熱と耳下腺の腫脹を来すのみですが、無菌性髄膜炎（強い頭痛や嘔吐）の他、稀な合併症として脳炎、難聴、精巣炎などがあり、後遺症を残す場合もあります。

### ➤ 検査、治療法について

周囲での流行に加えて、耳下腺の腫脹と発熱が見られた場合には特に検査などは行わずにこの病気と診断できます。周囲に流行がなく、その他の疾患と鑑別する必要がある場合には血液検査による確定診断が行われる場合があります。

また、ムンプスウイルスには特別な治療法はなく、発熱時や耳下腺の痛みなどに対する対症療法（解熱鎮痛薬）が中心となります。また、嘔吐が続き水分が摂れなくなった場合には点滴を行うこともあります。

### ➤ 最後に

流行性耳下腺炎は、多くの場合が軽症で自然に治っていきませんが、時に合併症を引き起こすことがあります。集団保育の場や学校で流行が始まると、ワクチン接種を行っていない子ども達は罹患する可能性が非常に高くなります。現在ムンプスワクチンは任意接種であり、我が国での接種率は30%程度と低いですが、有効性がしっかり証明されたワクチンですので是非接種することをお勧めします。

